

「おひとりさま」の時代に生きる

明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、おだやかな新年をお迎えのことと存じ上げます。本年も、どうぞよろしく願いいたします。

さて、1月元旦の新聞の記事を読んでいたら、私の心に引っ掛かる言葉ありました。「ヒトカラ」という言葉で、ひとりカラオケのことだそうです。近頃、カラオケを一人で楽しむ人が増えてきたというのです。平成の初め、私が30代の頃は、職場の飲み会の後のカラオケには20人ぐらいで行っていたことを思い起こしました。

そういえば、いつの間にか旅行会社のツアーの募集にも「おひとりさまで参加できます」という見出しも目に付くようになっていました。昨年のは「クリボッチ」という言葉も聞きました。クリスマスに一人ぼっちで過ごす人のことを言うそうです。2015年の国勢調査ではひとり暮らし世帯が初めて全体の3分の1を超すなど家庭の形も大きく変わってきたようです。

一方で、同じ日の新聞記事に、高齢化社会に入り、定年後に家族や地域のつながりが薄く、仕事一筋だった人がスムーズに退職後の生活に移行できないケースが問題になっているという内容も目にしました。会社以外の人とのつながりが出来ずに「ひとりで過ごす」定年後の生活に対するギャップが大きいというのです。定年後の生活に関する本の見出しには「老後は、お金や病気のことより『孤独』にならないことが大切だ」と書かれています。

現代の社会をこのような視点で振り返ってみると、若いも若きも「おひとりさま」がキーワードであることに気付かされます。ちなみに、昨年12月に生涯学習財団で開かれたシニア講演会のテーマも「おひとりさま」でした。

高崎経済大学准教授の國分功一郎さんは、「ひとり」について、ユダヤ人哲学者ハンナ・アーレントの言葉を引用して次のように新聞で紹介していました。

「アーレントは『孤独と寂しさは違う』と言っています。孤独とは、私が、自分自身と一緒にいること。自分と一緒にいられない人が寂しさを感じ、一緒にいてくれる他者を求める。だから、自己と対話できない。孤独になれば、人はものを考えられない。孤独こそ、現代社会で失われているものです。」

私は、「人は、一人では生きられない。人とつながっていなければならない」、「おひとりさま」や「孤独」になることは人生のマイナスだとずっと思いこんでいました。でも、この新聞記事を読んで、「自分自身と一緒にいる時間」を大切に、自己と対話することも必要なのだと思いました。平成時代の終りに、若い人たちが「ヒトカラ」や「ひとり旅」、「クリボッチ」などで自分と向き合う時間を創り、ようやく「孤独」の意味について考え始めるようになったということでしょうか。だとすれば、退職後の高齢者も「孤独」や「ひとり」でいることを恐れる必要もないことなのではないでしょうか。

新年から自分の「生き方」を考えさせられる記事でした。(M. Y)